

原発事故 15 年を前に思うこと

相馬市（震災当時浪江町／元教員）

私の 15年

右は私にとってこの 15 年間における大きなできごとです。中でも、両親がもとの家に帰ることなく亡くなったこと、自分が生まれ育った実家が無くなったこと、そして浪江の町民でなくなったことが辛く悲しいできごとです。

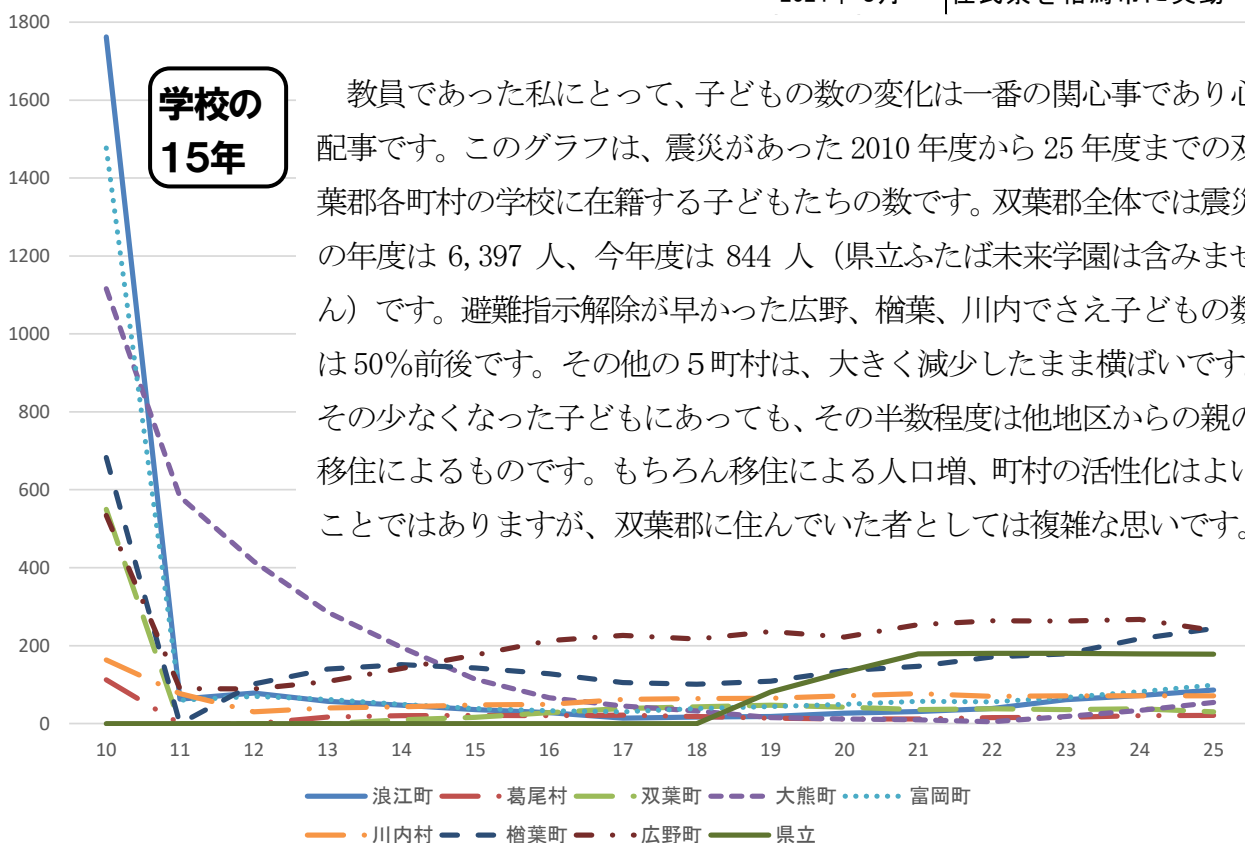
5 年前の「10 年の節目」の時、「私たち避難者にとっては単なる 10 年」に過ぎないと思いました。今回の「15 年」についても同じです。私たち避難者にとって、何かが終わったり、何かが整理できたりする「区切り」ではまったくありません。「避難」がたんとんと継続するだけのことで

【大きなできごと】

2011年 3/11	東日本大震災
3/12	避難（福島市へ）
3/13	避難（山形県遊佐町へ）
中旬	両親だけ埼玉へ
下旬	避難（郡山市へ）
2014年 4月	避難（相馬市へ）
	両親は南相馬市へ
11月	母親が脳卒中
2016年 9月	父親死去
2018年 7月	母親が福島市の施設へ
2020年 6月	実家の解体
2021年 8月	母親が死去
2022年 3月末	定年退職
2024年 8月	住民票を相馬市に異動

学校の 15年

教員であった私にとって、子どもの数の変化が一番の関心事であり心配事です。このグラフは、震災があった 2010 年度から 25 年度までの双葉郡各町村の学校に在籍する子どもたちの数です。双葉郡全体では震災の年度は 6,397 人、今年度は 844 人（県立ふたば未来学園は含みません）です。避難指示解除が早かった広野、檜葉、川内でさえ子どもの数は 50% 前後です。その他の 5 町村は、大きく減少したまま横ばいです。その少なくなった子どもにあっても、その半数程度は他地区からの親の移住によるものです。もちろん移住による人口増、町村の活性化はよいことではありますが、双葉郡に住んでいた者としては複雑な思いです。



教職員の 15年

原発事故後、双葉郡内の学校はそれぞれの変遷を経て、双葉町を除いて地元で学校を再開しました。その中で、かつて双葉郡の学校で勤務していた教職員は、その家庭環境や避難状況に応じて、双葉郡の学校からの距離をとるようになりました。表の 2019

年度は、「兼務」がなくなり双葉郡内での授業再開が本格的になった年です。19年度から24年度の間、震災当時双葉郡内に居住していたり、双葉郡内で生まれ育った教職員の数が半減しました。2024年度の数は、福島県教育会館発行の通称「職員録」により私が「推定」したのですが、25年度になると推定すらできなくなってしまいました。

町村	年度	
	2019	2024
浪江町	8	3
葛尾村	5	5
双葉町	12	4
大熊町	6	2
富岡町	9	6
川内村	3	2
楡葉町	17	9
広野町	14	5
合計	74	36

**退職者の
15年**

私は2022年に定年退職をして、福島県退職教職員協議会双葉支部の事務局長となりました。毎月1回の会報を、

県内外に避難している会員に

送付しています。妻は、福島県退職女性教職員の会「あけぼの会」双葉支部の会計を担当しています。お互いに会員の名簿を管理している関係で、震災前と震災後の会員の住所がわかります。

表は、震災前(左)と後(右)の住所です。

一部会員を除き、ほぼ全員が福島県教職員組合の組合員だった会員です。さらに、組合員だった退職者がすべて加入するわけではないので、双葉郡内の教職員全体としては、この数倍から10倍程度と予想されます。

【退職教職員の避難先】

浪江町	30
葛尾村	2
双葉町	8
大熊町	16
富岡町	26
川内村	1
楡葉町	18
広野町	6

107

県外	青森県	1	
	宮城県	2	
	茨城県	2	
	千葉県	2	
	埼玉県	2	
	神奈川県	1	
	静岡県	1	
	宮崎県	1	
	県内	福島市	12
		二本松市	2
本宮市		2	
郡山市		10	
田村市		1	
白河市		1	
会津若松市		2	
いわき市		32	
南相馬市		2	
相馬市		4	
桑折町		1	
三春町		1	
矢吹町		1	
会津坂下町		1	
双葉郡内		浪江町	3
		葛尾村	0
		双葉町	1
	大熊町	0	
	富岡町	1	
	川内村	2	
楡葉町	9		
広野町	7		

12

72

23

**写真で見
る15年**

この15年間で、私にとって大事な3つの写真があります。①2012年10月/妻と娘二人の自宅への立ち入り。長女はそれ以後一度も自宅に入っていません。②2015年3月/常磐道が全線開通した時の浪江町の光景。安倍元首相が「復興の起爆剤」と富岡ICで絶叫していた時、浪江町の道路にはカラスが我が物顔で群れていました。③

2020年6月/実家の解体。10年目にしてようやく解体。しかしそれを見届けるべき両親は、父は亡くなり、母は施設に入所しました。

15年を振り返り、募る思いは「こんなはずではなかった」というものです。人生が狂ったとまでは言いませんが、住むところが変わったり、親戚が遠く離れたり、子どもと一緒に暮らす時間が短くなったり・・・こんなはずではなかったのです。



15年前の東日本大震災の時、私は夜勤でした。自宅は食器棚が食台にもたれかかっていて、ガラス、食器類が落ちて割れて床に散らばっているし、水道の配水管がずれて水漏れしていて片付けるのに手間どりました。勤務できるか焦りました。「病院は崩れていないか、患者さん達は大丈夫なのか」不安になりながら出勤しました。

日勤帯で患者さん達をリハビリ室や外来ホールに集めて休ませていたので、全員無事であることを確認できました。病棟は2階から6階まで使用できず、重症患者さん達は若松市の大きい病院、喜多方市の病院へとそれぞれ救急車で転院しました。快く受け入れて下さいまして感謝感謝。ひとりの患者さんが床頭台の中に薬を忘れたとのことで6階の個室まで取りに行きました。暗く水浸しの部屋、「怖い怖い」のひとことでした。外来ホールに戻って夕食となりパンおかずの非常食を患者さん達と食べました。「安心・安全」を見守りながら夜勤帯は終わりました。東日本大震災は私の定年の年でもあって忘れられない一日の出来事でした。